

**カメラ一体型のロボットカメラヘッド“BU-43U”を発売
屋外向けリモート雲台で高精細な4K/60P映像を出力可能**

キヤノンは、屋外型ロボットカメラシステム「BU」シリーズの新製品として、高精細な4K/60P映像の出力ができ、放送局やケーブルテレビの高い要求に応える、カメラ一体型のロボットカメラヘッド“BU-43U”を2021年7月下旬に発売します。



BU-43U

“BU-43U”は、フルHD対応の従来機種「BU-42H」（2012年12月発売）と同等の小型軽量設計を維持しつつ、レンズ、センサー、映像処理プラットフォームなどのキーデバイスの刷新により、高精細な4K/60P映像の出力に対応しています。高品位な4K映像を得ることができるため、情報番組で街や景勝地の様子を伝える情報カメラや、天気の様子を伝えるお天気カメラなど、屋外のさまざまな場所や幅広い用途での使用を可能にしています。

■ キーデバイスの刷新による高精細な4K/60P映像出力

キヤノンの誇る優れた光学性能を持つ「L（Luxury）レンズ」の技術を投入した4K対応の光学15倍ズームレンズ、有効画素数約829万画素（3840×2160）の1.0型CMOSセンサー、映像処理プラットフォーム「DIGIC DV6」など、業務用ビデオカメラで培った技術をもとにキーデバイスを刷新しています。これにより、優れた色再現性と豊かな階調を持つ4:2:2（10ビット）の高精細な4K/60Pの映像出力が可能です。また、4Kの解像度を持ちながら、最低被写体照度0.2ルクス^{※1}を実現しています。

■ 既存システムとの高い互換性と従来機種同等の小型軽量設計

屋外型ロボットカメラシステムで採用する「U-4プロトコル^{※2}」に対応し、既存のオペレーションユニットや中継ボックスをそのまま利用することができます。また、本体の大きさは約337mm（幅）×約386mm（奥行き）×約390mm（高さ）、質量は約17kgと従来機種と同等の小型軽量設計を実現しています。既存の設置空間のまま、フルHDから4Kへと容易に置き換えることができ、高解像度化にともなう投資コストの削減に貢献します。

■ 屋外での設置・撮影に求められる耐環境性能

国際電気標準会議が定める水や異物侵入の保護等級の規格「IP55^{※3}」準拠の防じん・防滴性能を達成しているほか、ブレを軽減した撮影ができる防振機能やワイパーの標準装備により、強風や風雨にさらされる屋外の設置環境に対応します。また、4Kの映像制作に適した12G-SDI端子を搭載し、12G-SDI対応ケーブル（別売り）1本での4K/60P映像の出力に対応しています。

製品名	希望小売価格	発売日
BU-43U	オープン価格	2021年7月下旬

※1 F2.8、シャッタースピード1/4秒、フレームレート59.94P、ゲイン33.0dB時。
 ※2 屋外型ロボットカメラシステムを制御するキヤノン独自のプロトコル。「U-4」シリーズ、「BU」シリーズで採用。
 ※3 粉じんが内部に侵入しにくく、若干の侵入があっても正常運転を阻害しない「防じん性能5級」、あらゆる方向からの噴流水でも有害な影響を及ぼさない「防滴性能5級」に相当。

- 一般の方のお問い合わせ先：キヤノンマーケティングジャパン株式会社 03-3740-3304（直通）
放送・新聞営業部
- 放送・業務用映像機器ホームページ：canon.jp/bctv

<主な特長>

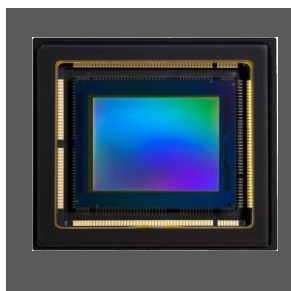
1. キーデバイスの刷新による高精細な 4K/60P 映像出力

- ・キヤノンの誇る優れた光学性能を持つ「L レンズ」の技術を投入した 4K 対応の光学 15 倍ズームレンズ、有効画素数約 829 万画素（3840×2160）の 1.0 型 CMOS センサー、映像処理プラットフォーム「DIGIC DV6」など、業務用ビデオカメラで培った技術をもとにキーデバイスを刷新。
- ・優れた色再現性と豊かな階調を持つ 4:2:2（10 ビット）の高精細な 4K/60P の映像出力を実現。
- ・4K の解像度を持ちながら最低被写体照度 0.2 ルクスを実現。
- ・光学 15 倍ズームに加え、フル HD 撮影時は 4K 対応 1.0 型 CMOS センサーを活用したアドバンスズームにより、最大 30 倍の撮影が可能。
- ・動画撮影に適した AF 動作と高い追従性を有する「デュアルピクセル CMOS AF」を搭載し、素早く自然なピント合わせが可能。フレーム単位で高い精度を求められる 4K 映像のさまざまなシーンにおいて撮影をアシスト。

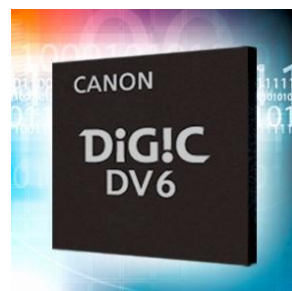
光学 15 倍
ズームレンズ



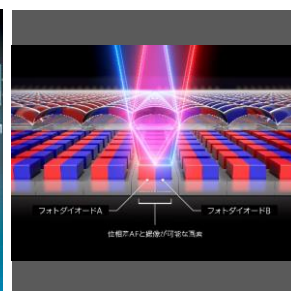
4K 対応 1.0 型
CMOS センサー



映像処理プラットフォーム
「DIGIC DV6」



デュアルピクセル
CMOS AF の仕組み



業務用ビデオカメラで培った技術により刷新したキーデバイスと AF 技術（イメージ）

2. 既存システムとの高い互換性と従来機種同等の小型軽量設計

- ・これまで多くの納入実績があるキヤノンの屋外型ロボットカメラシステム「U-4」シリーズ、「BU」シリーズで採用されている「U-4 プロトコル」に対応し、既存のオペレーションユニットや中継ボックスをそのまま利用することが可能。これにより、既にキヤノンの屋外型ロボットカメラシステムを使用したシステムを構築しているユーザーにおける、投資コストの削減に貢献。
- ・リモートカメラ本体の大きさは約 337mm（幅）×約 386mm（奥行き）×約 390mm（高さ）、質量は約 17kg と従来機種同等の小型軽量設計を実現しており、既存機種からの置き換えが容易。

3. 屋外での設置・撮影に求められる耐環境性能

- ・国際電気標準会議が定める水や異物侵入の保護等級の規格「IP55」準拠の防じん・防滴性能を達成。粉じんが内部に侵入しにくく、若干の侵入があっても正常運転を阻害しない「防じん性能 5 級」、あらゆる方向からの噴流水でも有害な影響を及ぼさない「防滴性能 5 級」に相当。高い耐候性により風雨にさらされる屋外の設置環境にも対応。
- ・強風時にもブレを軽減した撮影ができる「防振機能」を搭載。
- ・4K の映像制作に適した 12G-SDI 端子を搭載し、12G-SDI 対応ケーブル（別売り）1 本での 4K/60P 映像の出力に対応。

<ご参考：放送用ロボットカメラシステムについて>

キヤノンの放送用ロボットカメラシステムは、1974年に発売した「U-1」に始まります。カメラヘッドのパン、チルト、レンズのズームやフォーカスなどを電話回線や専用線を用いて遠隔制御できる放送用ロボットカメラシステムは、発売以来、気象・交通・スポーツ中継などの多くの現場で活躍してきました。

中でも1986年に発売した屋外型ロボットカメラシステム「U-4」シリーズは、東京都・伊豆大島の三原山や長崎県の雲仙普賢岳などの火山活動の監視や中継、南極からの映像伝送など、多様な場所・用途で活用されており、日本市場で高い市場シェアを占めています。

また2003年1月には徹底したローコスト設計で低価格を実現した「BU-400N」を発売し、優れたコストパフォーマンスと「U-4プロトコル」への対応を実現した「BU」シリーズを加え、ラインアップを拡充。用途に応じた多様なラインアップを構築し、日本国内で放送用ロボットカメラシステムとして計7機種を展開しています。

タイプ	カテゴリー	製品名	発売年
屋外型	U-4シリーズ	U-4RII	2001年
		U-4SPII	2002年
	BUシリーズ	BU-43U	2021年
		BU-42H	2012年
		BU-47H	2012年
屋内型	U-5シリーズ	U-5A II	2006年
		U-5EL/U-5EL/V	2006年

放送用ロボットカメラシステム 計7機種

<放送用ロボットカメラシステムの市場動向>

日本国内では2018年12月より新4K8K衛星放送が開始され、4K対応機材の導入がさらに加速しつつあります。またビルの屋上や景勝地などに常設し、遠隔操作で映像を撮影できるロボットカメラシステムは、天気予報や報道番組などの用途で、多くの放送局やケーブルテレビで採用されています。(キヤノン調べ)

<主な製品仕様>

製品仕様の詳細は、ホームページをご参照ください。